

編集後記

今月初め、東京で開催された観光庁主催の「日台教育旅行交流座談会」に参加し感じたことをここに述べさせていただきたいと思う。当日、台湾から高校の先生が約80名来日され、日本の教育関係者・自治体関係者と訪日教育旅行の促進に向けた課題について話し合いが行われた。台湾側が訪日教育旅行に求める主なプログラムには、学校交流とホームステイがある。生徒同士の交流、地域社会との交流。人と人との「交流」を台湾が重要視していることがよくわかる。

ホームステイと聞くと学生時代に交換留学でアメリカから来た学生を我が家で受け入れた時のことを思い出す。受入家庭に決まった途端、家族中が大騒ぎしたものの、結局、いつも通りの日常と一緒に過ごしてもらった。何か特別なことはせず、日本での生活を体験してもらうことが何よりも重要だと考えたためだ。しかし実際は、食生活の違いや言葉の壁、様々な問題があることも事実でホームステイの実施は中々容易ではないため、受入家庭数を着実に増やしている自治体の方のお話を伺うと地道な努力を重ねており頭が下がる思いである。

座談会の中でも台湾の高校の先生からは「学生同士の交流をもっと増やしたい」「ホームステイは必ず実施したい」という意見があった。それに対し、日本側の学校関係者からは学校交流の内容について、また自治体関係者からは農家民泊など、それぞれ実施可能な具体的な提案があり、双方が非常に熱心にお互いの意見に耳を傾けていた様子が印象的であった。訪日教育旅行を促進することは、日台間の青少年交流を活性化させることに直結しているため継続的に実施していく必要がある。まだまだ課題があるにせよ、今後の発展が多いに期待できる非常に有意義な座談会であった。

(Y.K.)